

コーパスとXに見られる「-み」形の成立過程について

趙 凱丹(九州大学大学院生)

1. はじめに

本発表では、接尾辞「-み」の意味に着目し、基体と接尾辞「-み」からなる「-み」形がどのようなメカニズムを経て形成されたのかを示すことを目的とする。接尾辞「-み」は従来は一部の形容詞のみに接続していたが、その接続の制約が緩和され、より多くの形容詞、形状詞、名詞、さらに動詞、名詞句、節まで取れるようになった(杉岡, 2005; 水野, 2017)。また、接尾辞「-み」の運用においては、基体の拡張のみならず、(1)のように、本来は調味料を指す「砂糖」がキャラクターである「人間」を指すことができるようになっている。このような現象は、従来の研究(小出, 2000; 杉本, 2015)で指摘されてきた、接尾辞「-み」の多義性や基体の形態的な拡張だけでは説明が付きにくいと考えられる。この場合、基体も何らかのメカニズムを経て「-み」形の成立に働きかけっていると推測する。

- (1) バイト霧島くんの新キャラ2人の砂糖みがよい (X, 2016/10/14)

2. 先行研究と問題点

従来の研究では、接尾辞「-み」の基体の拡張について、本来は一部の形容詞のみ取ることができるという形態的制約が緩和し、形容詞のほか形状詞、名詞、動詞、節まで取れるようになったという、形態的観点から網羅的に調査が行われている(杉岡, 2005; 水野, 2017; 宮内, 2021)。その理由として、接尾辞「-み」の「具体的な感覚」という意味により、本来は属性を表しにくい基体が接尾辞「-み」を取ることで属性を表すようになり、接尾辞「-み」を取れるようになった基体が徐々に増えてきたと理由付けられている(杉岡, 2005: 79)。

しかし、全ての「-み」形がそのような経緯で成立したとは限らない。たとえば、(1)の「砂糖み」は、基体の「砂糖」に接尾辞「-み」を取ることを通じて、対象に当たる新キャラクターが砂糖のように甘い性質を持っていることを表している。この場合、本来は調味料しか指すことができない基体の「砂糖」が、その意味範囲を超えて人間の性質を指すようになったことが窺える。(1)の「砂糖み」は、接尾辞「-み」の「具体的な感覚」という意味は適切ではないと考える。

加えて、(2)のように、近年若年層で多用されるようになった、主体側(話し手)の感覚や感情を表す文脈に用いられる接尾辞「-み」も挙げられる。この例では、接尾辞「-み」の意味する感覚は対象側の持つ感覚ではなく、受ける側の感覚を指している。

- (2) よっしゃあ!! 急いで撮ったからブレブレやけど嬉みの極み (X, 2021/1/4)

さらに、(3)と(4)のように、同じ基体からなる「-み」形でも、置かれた文脈が異なると接尾辞「-み」及び形成された「-み」形の語の意味が異なる。

- (3) 底知れない深海の深みから、何かえたいの知れないものの群れが、浮きあがってくるのだ。(BCCWJ, LBan_00029, 26700)
(4) もし光だけだったら、人もものものっぺらぼうで深みも魅力もない。(BCCWJ, LBp3_00053, 6310)

これらの例から、基体の拡張は、単に接尾辞「-み」自体の意味に起因すると結論付けるのは不十分であり、置かれた文脈によって基体にも何らかの変化が起きていると言える。

また、接尾辞「-み」の多義性も確認される。その意味は次のように網羅的にまとめられている。

み1: 対象の持つ性質を表す「み」(例「深み」「厚み」「丸み」)

み2：場所の持つ性質を表す「み」（例「深み」「高み」）

み3：感覚を表す「み」（例「苦しみ」「痛み」）

小出（2000：5）

小出は、み1とみ3について、対象に対して感じる感覚であるかどうかを基準に、前者は対象側の持つ性質を表すのに対し、後者は主体側の持つ感覚を表すと区別している。本研究では、接尾辞「-み」の意味を小出の分類を参考にしつつ若干の修正を加え、次の3つに分類した。その上で、接尾辞「-み」の意味に着目し、(1)の「砂糖み」を含め「-み」形がどのような過程を経て成立したのか、なぜ「-み」形が拡張していったのかを考察する。

①対象の持つ性質を表す（例「深み」「厚み」「丸み」）

②場所の持つ性質を表す（例「明るみ」「高み」）

③主体の持つ感覚や感情を表す（例「嬉しみ」「分かりみ」）

3. 研究方法

調査では、現代日本語書き言葉均衡コーパス、昭和・平成書き言葉コーパス、日本語話し言葉コーパス、日本語日常会話コーパス、昭和話し言葉コーパス、名大会話コーパス、現日研・職場談話コーパスという7つのコーパスとXを利用し、接尾辞「-み」の用例を抽出する。抽出にあたり、「緩み」のような動詞の名詞化したもの、「醤油味」のような「味」の読みが「あじ」であるか「み」であるか定められないもの、(5)のような意味不明なものは対象外として除外した。

- (5) そうするとやばみの茂木先生のやばみの記事が非常に大きなアクセスを稼いでましてこれがあの（CEJC, W001_003c, 10560）

4. 調査結果

4.1 接尾辞「-み」の意味分類

本研究の接尾辞「-み」の意味分類に従い、コーパスとXから抽出した接尾辞「-み」の意味分類を表1に示す。

意味分類	表1 コーパスとXに見られた接尾辞「-み」の意味 使用頻度（%）	
	コーパス	X
①対象の持つ性質を表す	11,055 (95.56%)	433 (84.57%)
③主体の持つ感覚や感情を表す	323 (2.79%)	79 (15.43%)
②場所の持つ性質を表す	191 (1.65%)	—
計	11,569 (100.00%)	512 (100.00%)

コーパスとXに見られた接尾辞「-み」の意味の様相から、意味①および意味③の使用範囲の広がり、意味②の衰退が分かった。そして、Xに見られた意味②の衰退について、単にXでは意味②で使われる接尾辞「-み」が用いられにくいためか、他の表現形式でその意味が使われているためかは考えられる。接尾辞「-み」の接続の制約が緩和したことで意味①に用いられる基体が多様になり、形成された「-み」形は依然「対象の持つ性質を表す」ものの、「-み」形同士が異なる成立過程を辿っていると推察する。

4.2 「-み」形の成立過程

以下で、意味変化のメカニズムであるメタファーとメトニミーという概念を用いて、コーパスとXに見られた「-み」形の成立過程を検討する。まず、話題の事物や概念を表す際、基体である表現の意味範囲が変わったか否かによって、「-み」形の成立過程を2つに分けられる。1つは基体が意味変化のメカニズムを経ずに「-み」形を形成する場合、もう1つは基体

が意味変化のメカニズムを経て「-み」形を形成する場合である。後者の場合、基体が以下のメタファーやメトニミーのメカニズムを経て接尾辞「-み」を取って「-み」形を形成する。

メタファー：二つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喻。

メトニミー：二つの事物の外界における隣接性、さらに広く二つの事物・概念の思考内・概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喻。

町田編・靱山著（2002：65-76）

この分類基準に従い、コーパスとXに見られた「-み」形の成立過程を表2に示す。

表2 コーパスとXに見られた「-み」形の成立過程			
基体の意味変化		使用頻度（%）	
		コーパス	X
意味変化なし		7,146 (61.77%)	227 (44.34%)
意味変化あり	メトニミー	4,423 (38.23%)	274 (53.52%)
	メタファー	—	11 (2.15%)
計		11,569 (100.00%)	512 (100.00%)

コーパスとXに見られた「-み」形の成立過程の様相からは、2つの相違点が分かった。1点目に、Xでは、コーパスに見られていなかった基体がメタファーのメカニズムにより形成された「-み」形が確認された。これは、コーパスに見られた基体と比べて、Xではより多くの名詞を取れるようになったことに起因する。2点目に、基体が同じメトニミーのメカニズムを経て「-み」形を形成したとしても、Xでは、コーパスと異なり、基体に用いられる名詞の多様化により、最も頭に浮かび上がりやすく、典型的なイメージを表す表現が参照点になるメトニミーのメカニズムが多用されている。

上記の分析から、「-み」形の成立過程について次の3点が言える。1点目に、「-み」形が多様な文脈に用いられるのは、接尾辞「-み」の意味に依存しているのに加えて、基体の意味変化にも関わる。2点目に、表現上の需要のため基体の多様化が促されるにつれ、「-み」形の成立過程も多様化へ促進されている。3点目に、同じ関連性の認知基盤により形成された「-み」形であっても、「現実み」のように抽象化された概念を表す基体を使うこともあれば、「漫才み」のように具体的な概念を表す基体を使うこともある。

5. 考察

分析結果に基づき、造語法のシンプルさと表現上の需要の2つの観点から、意味①「対象の持つ性質を表す」や意味③「主体の持つ感覚や感情を表す」に見られる「-み」形の拡張を考察する。

まず、名詞化の造語法からみると、形容詞は接尾辞「-み」による名詞化であるため造語上の規則性と単純化があり、そして1つの接尾辞「-み」に多義的に意味を取れる。それに対し、他の品詞は、話題の事物や人物を表すたびに品詞と文脈に合わせて異なる接尾辞「-感」「-らしさ」「-ぼさ」や説明的な表現「気持ち」「感じ」を選び出す必要があると考えられる。それゆえ、造語法のシンプルさへの追求のため、規則性のない名詞化のパターンを持つ品詞も規則性のある名詞化のパターンが要請される。そうすると、多義性で造語上の規則性と単純化を兼ねた形容詞に使われる接尾辞「-み」による名詞化のパターンを受け入れることによって品詞の名詞化のパターンの整合性が促進される。

次に、表現上の需要からみると、多様な「-み」形の様相は、書きことばや話しことばという表現形態と比べて、話しことばの要素を多く含む書かれたことば、コンピューターを媒介としたコミュニケーション（以下、CMC）に用いられる「打ちことば」（文化審議会国語分科会，2018：4-5）で多く出現する。これは、不特定多数の利用者が目にするという性格を持つCMCにおいて、使用者が「-み」形を1種の婉曲表現として使っているためである（茂木，2018）。茂木が指摘した語用論的な婉曲機能だけでなく、コミュニケーションを行う際に相手に話題の対象を端的に伝えられるためにも多様な「-み」形が求められる。これは、既に従来から使われている「-み」形に見られた特徴である（宮内，2021）。鑑賞や批評という対象から感じられることを言語化する必要がある際、「金味」「幽玄味」「迫真味」という抽象的な概念を表す基体からなる「-み」形が用いられる傾向がある（同上：242-241）。一方、インターネット時代の現在では、話題の対象に対する捉え方やイメージも

鮮明に伝えられればコミュニケーション上の娯楽性も実現できるため、基体としてはこれまで使われている文字言語だけでなく CMC のみで用いられる視覚言語まで拡張したと考えられる。「-み」形によるイメージの喚起については、水野(2017: 172-173)でも類似した指摘が述べられている。

また、このような表現上の需要は、CMC のネット集団語の範疇を離脱し、日常生活で用いる話しことばでも幅広く使用されている(有馬, 2021: 10-18)。ここから、CMC に使われる「-み」形の浸透性が示唆されただけでなく、メディアによる言語表現の変容の一端も窺える。たとえば、電話する際に相手の注目を引くために使われていた「Hello」が電話の普及につれ電話する以外の日常生活でも汎用的な挨拶表現として定着していった現象がある(グレッツェン・マカロック 2019/2021: 268-271)。同様に、インターネット時代の現在では、「-み」形を含め CMC で多用される言語表現が、多様なメディアを通じてより多くの人に拡散していくことにより、ある特定の集団に使われる語の範疇から離脱し、対面で使う話しことばへ浸透していくと考えられる。

6. まとめ

本発表は、コーパスと X に見られた接尾辞「-み」の意味に着目し、多様な「-み」形が成立できるのは、単に接尾辞「-み」の多義性に依存しているだけでなく、置かれた文脈によって基体がメトニミーやメタファーの意味変化のメカニズムを経る必要があることを示した。実際の運用においては、「-み」形の多用について、従来指摘された「-み」形の語用論的な婉曲機能と異なり、形態上の造語法のシンプルさに加えて、表現上の需要に応じて「-み」形が喚起性、娯楽性、そして CMC に使われる場合の特有性という特徴を持つ。基体の拡張と「-み」形の多用からは、CMC に多用される言語表現が、多様なメディアによる拡散を通じて集団語の範疇を離れて日常生活で用いる話しことばへと浸透が加速し、CMC 上の言語表現から話しことばへの影響が促されると予想する。

参考文献

- 有馬桃子(2021). 名詞化接尾辞「-み」の新しい用法について 広島大学卒業論文。
- グレッツェン・マカロック(2019). *Because Internet: Understanding the New Rules of Language*. Riverhead Books. (千葉敏生訳(2021). インターネットは言葉をどう変えたか フィルムアート社)
- 小出慶一(2005). 形容詞の意味の一側面―「～まる」と「～み」のつく形容詞― 群馬県立女子大学国文学研究, 20, 1-13.
- 杉岡洋子(2005). 名詞化接辞の機能と意味 大石強・西原哲雄・豊島庸二(編) 現代形態論の潮流 くろしお出版 pp. 75-94.
- 杉本裕子(2015). 近世近代における接尾辞「み」―結合の拡大と衰退― 国語研究, 78, 10-23.
- 文化審議会国語分科会(2018). 分かり合うための言語コミュニケーション(報告) (https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/wakariau/pdf/r1403493_01.pdf) (2024 年 12 月 3 日最終閲覧)
- 町田健編・靱山洋介著(2002). 認知意味論のしくみ 研究社
- 水野みのり(2017). ネット集団語における接尾辞「-み」の語基拡張 思言: 東京外国語大学記述言語学論集, 13, 167-174.
- 宮内佐夜香(2021). BCCWJ を活用した接尾辞「-み」の実態調査 中京大学文学会論叢, 7, 234-250.
- 茂木俊伸(2018). 若者ことばの「やばみ」や「うれしみ」の「み」はどこから来ているものですか (<https://kotobaken.jp/qa/yokuaru/qa-34/>) (2024 年 12 月 3 日最終閲覧)